

東亜同文書院とキリスト教

——キリスト教信者坂本義孝の書院精神——

石田卓生

はじめに

本稿は、東亜同文書院の実質的創立者根津一^{はじめ}の思想と教育活動、それを継承しようとした同校出身教授であるキリスト教信者坂本義孝の活動を追うことによって、東亜同文書院のキリスト教にかかわる側面を論じるものである。

東亜同文書院は、一九〇一年（明治三四）から一九四五年（昭和二〇）まで上海に存在した日本人運営の学校である。日中提携を担う経済人養成を目指して開校し、学術研究面を整備することによって後に大学に昇格した。学内には学生YMCAも結成されるなどキリスト教信者がおり、その中の福井二郎（第一七期生）、堀亮三（第二二期生）、



村井美喜雄（第二七期生）は牧師となり、坂本義孝（第一期生）、藤原茂一（第九期生）、森沢福五郎（第一三期生）は母校の教職に就いている。もちろん、東亜同文書院はキリスト教系の学校ではなく、また信仰を個人的な事柄でしかないと考えるならば、信者がいること自体は不思議ではない。しかし、坂本義孝については信仰を個人のみの問題とすることはできない。かれは東亜同文書院教授以外にも、上海日本人YMCA³理事長として同YMCA経営の外国語学校で教鞭をとり、また上海に存在したキリスト教系の聖約翰大学⁴教授に就くなど、つねにキリスト教との関わりの中で教育活動に従事していたのである。つまり、その活動はキリスト教信仰に基づいたものであったといえる。そのような人物が東亜同文書院で学び、教授となつてい

以上、東亜同文書院とキリスト教の関わりが問題となるのではないだろうか。

一 書院精神とキリスト教

(一) 書院精神

東亜同文書院についてよくとりあげられる事柄が二つある。一つは、学生のみで中国大陸を踏査する「大旅行」である。これをもとに編まれた『支那省別全誌』、『新修支那省別全誌』は総合的中国研究として評価されてきたが、「大旅行」自体も大規模な地域研究として藤田佳久氏によって再評価がすすめられている。もう一つは「書院精神」とよばれるものである。これについて竹内好は次のように述べている。

根津一は卒業生の多数によって今でも追慕されており、「根津精神」または「書院精神」ということばがよく取り交わされている。(中略)この団結心、一種の精神共同体を遺産として残したことが、歴史の古さだけではなく、東亜同文書院を他の類似大学とちがった特色ある存在たらしめているようだ。

このように書院精神とは根津一⁽¹⁾の思想そのものであった。この傾向は根津に直接師事した学生間では特に強かつ

たようである。ある学生は入学式での根津の訓辞に感動したことを記している。

院長は、「同文書院は単に学問を教えるだけの学校ではない。学問をやりたい者は大学にゆくべきだ。大学は学問の蘊奥を究めるところであるから、そこで学ぶのが正しい。諸子の中で学問で世に立ちたい者があれば、よろしく高等学校から大学に進むべきで、本日の席において退学を許す。志を中国にもち、根津に従って一個の人間たらんと欲する者は、この根津とともに上海にゆこう」と厳肅莊重な口調でいきつたのである。⁽¹⁰⁾

こうした言葉が学生の心をとらえ、その思想を深く浸透させていったのだろう。また、宗教と直接関わりない高等教育機関でありながら「人間たらんと欲する者」という言葉にあらわれているように、徳育を重視する姿勢がかれの教育の特徴であった。

(二) 根津一の思想

(1) 王陽明の思想に基づく道徳教育

根津一の思想すなわち書院精神とはどのようなものなのだろうか。かれは五〇年近い東亜同文書院の歴史の中で二〇年余り院長をつとめた教育者であった。軍人であった頃から中国問題に取り組み、すでに東亜同文書院院長就任以

前に上海の日清貿易研究所⁽¹⁾に参画してゐる。その思想について栗田尚弥氏は次のように述べてゐる。

根津の思想の根本にあつたのは、儒教とくに陽明学であつた。陽明学の思想は、「生民」の「困苦荼毒」を「吾が身」のこととして捉え、これを取り除くために即行動に移すことこそ「良知」である、とするものである。(中略) この陽明学の「良知」論は、万人すべてがそれぞれに所を得た社会を理想とする清末の大同思想へと、また大同社会を実現するための政治論、王道論へと繋がつていく。

王陽明思想の影響は、東亜同文書院での活動にも認められる。王陽明思想の關鍵にある「知行合一」(認識と体験行動を不可分とする)、「事上磨練」(日常生活での自己修養)は、参禅を好んだ根津の自己修養はもちろん、東亜同文書院での中国を知るために中国の直中に入つて生活し「大旅行」するといった実体験に重きをおく教育課程に通底する。さらに、そこから日中間にあつてどうすべきなのかを思索し判断することは「良知」論につながるだろう。

また、根津は自らの思想を学生に直接伝えている。商業学校である東亜同文書院にあつて、かれは実務的とはいえない「倫理」科目を設け、王陽明の『古本大学』を自ら講義した。こうした教育活動の中で、その思想は栗田氏が述べた政治論へのつながりよりも、道徳的な意味において強

い印象を学生にあたえていた。

その教育の方針は、人格の向上にとめることを主とし、愛と義とを重んずべきことをその両翼とした。いわゆる根津精神の真髄はここにあつたと解していいだろう。

「大旅行」を監督指導した根岸⁽²⁾も、その思想を「明治初年我が国に流行した英米功利主義と正反對なる東洋道徳主義であつた」と述べている。この德育重視の姿勢は、根津の教育活動の特徴であり、すでに軍人時代には近代化を急ぐあまり技術偏重となつてゐる軍隊教育を批判し、道徳教育の重要性を説いた「将徳論」、「哲理論」を著している。さらに、儒教に基づく中国人教育を行う大学の構想もちつづけ、日本国内でも德育を主とする誠明学社なる団体を計画していた。

このように根津の思想は、王陽明思想を基層において、大同の語や王道論といった政治論につながりうるのであつたが、東亜同文書院では人間形成のために道徳面に重きをおくものとしてあらわれ、これが書院精神を形作つたのである。

(2) キリスト教側からみた書院精神

栗田尚弥氏は、根津一の思想に影響をあたえた王陽明について、内村鑑三がキリスト教信者の立場から「陽明学の始祖王陽明をキリスト教に『最も近くまで達した』中国人

と評したのはたんなる偶然ではない」と評価していることを指摘している。それは具体的には次の一文を指す。

the writing of Wang Yang Ming, who of all Chinese philosophers, came nearest to that most august faith, also of Asiatic origin, in his great doctrines of conscience and benign but inexorable heavenly laws.

陽明学は数ある中国思想のなかでも、善悪の観念と寛容ながらも厳格な天の法を説く崇高な教えという点で、同じアジアから生まれたかの威厳ある信仰（キリスト教）に最も近い。

これはキリスト教信者にとつて東洋に生じた王陽明思想が断絶したのではなく、かえって相似点を見出しうることとを意味する。王陽明思想を基層におく書院精神においても同様であり、実際に校内のキリスト教信者は書院精神と信仰を並存させていた。

酒こそは愛したが、謹厳己を持し、身を修めることをすべての根元とした根津精神は、厳しいクリスチャンの戒律とも相容れるものであったといえよう。

また、キリスト教側からみて書院精神が違和感ないものであるならば、逆方向からみたとき同様であった可能性がある。根津がキリスト教を直接評価した資料は見出していないが、かれはキリスト教との接点を身近な所にもついていた。それは妻の存在である。この人はキリスト教信者

で、同志社女学校高等科（現同志社女子大学）を卒業し、母校で英語や数学の教鞭をとったという。同志社時代には、洋装、洋食を好み、教育者を志してアメリカ留学を考えるなど、当時としては所謂進んだ女性であった。このことは結婚生活に関する話にもあらわれている。

自分（ゑい）は根津家に嫁ぎしより、日日先生に仕ふる間に、若し先生にして非点有らば如何にもして其の非を改めさせ、どこまでも立派な家庭として婦道を尽くさんと、婦人の強き信念を以て一日一日と日を送れる。

受動的に夫に付き従うのではなく、夫の欠点を自ら正して家庭を築こうとする能動的姿勢には、女性としての強い自意識がうかがえ、ここに女性宣教師に師事した教育の影響を感じることができらる。さらに、キリスト教信者の立場から根津に接してもいる。

姉（ゑい）は同志社育ちでございますから、今のクリスチャンと違ひまして、あの時分のクリスチャンはなかなか信仰心が篤かつたと申しますが、叔父の感化を受けたためにイエスキリストとを信仰してゐたのでございます。至つて同志社出のハイカラさんで、クリスチャンであつたのでございますが、根津の家へとなつてからはさっぱり根津さんの方へ立て換へになつて、「これは根津先生のお偉い事と、奥さんの従

順な事と、日本人としての特有の徳を持つてをられたためや」という方もございます。

しかし姉は姉で、ここへ片付きます前は、ちやんと話がきまりまして、一何でも変つた人物ださうだから、一つクリスチャンに導いて上げよう」と思つてゐたさうでございます。併しそれは結局反対になつたのでございまして、頭山（満）さんが「日本の婦人の鑑とすべき人だ」といふことを申されたさうでございます。

ゑいの根津への伝道は成功せず、かえつて彼女は論語や仏教に関する書を繙き、写経や読経をして、時に建仁寺管長をたずねて教えを乞うようになる。このキリスト教信者からの変化は強制されたものではなく、前掲文のように自発的なものであつた。また、彼女はある新婦に向かつて、「あなたに新婚の躑をした。それは先生（旦那さん、亭主の意味）を神様と思ひなさい」と言つたという。夫を神とするという言は、ゑいが根津を信仰の対象としてゐるかのようである。彼女のキリスト教信仰は、構造はそのままに対象が根津に置き換わつたといえるのかもしれない。こうした妻の存在は、根津の人となりキリスト教信者に拒絶感を覚えさせるものでなかつたこと、根津の方にもキリスト教への偏見がなかつたことを示しているだろう。

このように書院精神とは、根津一の思想を基底とした道

徳教育を通じて東亜同文書院に醸し出されたものであつた。それが含む王陽明思想は、キリスト教信者からみたときに相似点を見出しうるものであつたし、妻ゑいが感化されたことからうかがえるように、キリスト教信者にとつて根津という人物やその思想は対立するものではなかつたのである。

二 東亜同文書院におけるキリスト教

(一) 聖書研究会

東亜同文書院第一期生は、一九〇一年（明治三四）四月東京華族会館において入学式を行い、五月八日上海市街南郊江南機器製造総局近く高昌廟桂墅里の東亜同文書院に入り学生生活をはじめている。

高昌廟桂墅里校舎は、もとは開明的実業家経元善けいげんぜんによる中国人経営初の女学校であり、後に羅振玉が設立し王国維も学んだ東文学社が使用していたものである。⁽³¹⁾しかし、その施設は東亜同文書院にとつて満足いくものではなかつたようで、「校舎は（中略）粗末なものであつた。ここに教室・寮舎・職員住宅などを建て増し、ようやく一応の体裁が整つたのは三十六年（一九〇三）の六月頃であつて、二年かかっている」と伝えられている。⁽³²⁾第一期生のひとり坂

本義孝も「私が来た時には教師と学校との設備は更に甚だ不完全」⁽⁵³⁾、授業についても「学課の名ありて実なき事などには歎焉たるものがあつた」⁽⁵⁴⁾と述べている。

このような体制も整わない開学当初から校内にはキリスト教的な活動がすでにみられた。それは英語講師チャールズ・ハネックス (Hunex) ⁽⁵⁵⁾ による聖書研究会である。これは上海 Y M C A 協力主事であつた。現在の Y M C A は、キリスト教的な考え方を基底におきつつも布教活動を行う教会とは異なるものであるが、当時両者の線引きは曖昧であつたようである。上海在住日本人のキリスト教会は、一九一四年 (大正三) に上海日本人 Y M C A から独立するよ
うな形で成立してあり、Y M C A は教会組織の前段階の位置にあつたと考えられる。ハネックスは東亜同文書院で英語を教えつつ学生を集めて聖書研究会を催し、三六名の参加をみたという。これについて上海 Y M C A 総主事ロバート・E・ルイス (Robert E. Lewis) は、一九〇一年八月北米 Y M C A 同盟へ次のように報告している。

The enterprise of the Japanese in China is very marked. They have a government college here of one hundred Japanese students who are fitting to be interpreters in consular or business offices. We are teaching 80 of these students in daily English classes, and I have two weekly Bible classes with 45 members among graduates and

undergraduates of this and other Japanese college. As the Bible may not be taught in the class-rooms of the college, we have rented a three-roomed tile roofed house just opposite the college buildings for a Japanese Association House. Could you look in on Sunday morning you would see from thirty to forty men sitting, Japanese style, on the matted floor and studying the Gospel of Mark with the American teacher, also sitting on a mat, in the midst of them. The little house is being fitted up for Association purposes, with the class-room on the left seating (on the floor) fifty students, with a reception room in the center and a reading-room on the right. Three of the class are baptized Christians, two more desire to be.

(訳) 中国での日本人の事業は注目すべきものです。かれらには領事館や企業の通訳になるであろう百名の学生を擁する政府系の学校 (東亜同文書院) ⁽⁵⁶⁾ があります。わたしたちは毎日英語の授業でこの八〇名を教え、この大学と日本の他大学からの学部生及び卒業生の中から四五名が参加する週一回の聖書研究会を二クラスもっています。聖書を学校の教室で教えることは許可されていないため、学校にある日本のアソシエーション・ハウス (事務棟?) の真向かいに三室あるタイル葺きの建物を借りました。日曜の朝には三〇名から四〇名が、日本式に、床の敷物に直に座り、その真

ん中に座るアメリカ人教師と〔聖書の〕「マルコによる福音書」を学んでいるのを垣間見ることができず。そのささやかな建物は組織の目的にふさわしいもので、左側は（床に直に座って）五〇名が座る聖書研究会のもの、中央に応接室、右側に勉強部屋があります。会に参加した三名はキリスト教の洗礼をうけ、二名がさらに洗礼を希望しています。

翌一九〇二年（明治三五）には常時二五名、平均三五名が参加、一九〇三年（明治三六）も二五名が参加し、同年三月のハネックス退職後も活動はつづき、一九〇四年（明治三七）には七五名から九一名が参加、さらに聖書研究以外にも野球チームを結成したり、日露戦争時の日本YMCA同盟の軍隊慰問活動へ参加したりしている。ここでの学生の様子について上海YMCA総主事代理D・ウィラー・D・ライアン（D. Willard Lyon）は一九〇三年九月三〇日付報告書に次のように記している。

Not the least interesting, I trust not the least fruitful work which I have been able to do in the line of Bible teaching during the year, was the class in the Japanese Commercial College in Shanghai. This class averaged between thirty and forty in attendance and was conducted in English. I find the Japanese students much more philosophical in their turn of mind than the Chinese

Students. Many most interesting questions were asked in the class.

（訳）興味深く、またわたしが確信しているのは上海での日本の商業学校（東亜同文書院）で一年間にわたる有意義な聖書教育ができたことです。このクラス〔聖書研究会〕の参加者は平均三〇名から四〇名ほどで、英語で行われました。日本人学生は中国人学生よりも性質がきわめて哲学的です。幾多の興味深い質問がクラスでなげかけられました。

このように宗教者であるライアンが会の活動と東亜同文書院学生の質への手応えを感じていることは、聖書研究会の性格がきわめて宗教的であったことを示している。そして「In the Japanese Commercial College」の行からは、同会が校内で活動していたようにとることができる。前掲ルイス報告書では許されていなかったとされていた校内活動が、後に許可されたのである。

校舎内で賛美歌や祈りをする事が厳禁であったが、ルイスやハネックスらの指導よろしきを得て、漸次理解が進み聖書研究には祈りが欠かせぬものである事が了解されて解除となった。

讚美歌、祈りというような完全な宗教活動が校内で許されていたことは注目すべきであろう。東亜同文書院の出身者の回想のなかにも、このような活動の存在をうかがわせ

るものがある。

根津先生は基督教そのものに対して、一種の理解を持つていられたようである。二期の有志で作ったパイブルクラス〔聖書研究会〕に教室を利用すること、集合にドンドン太鼓を叩くことなど、院長から一応は断わられたが後には許して下すつたとのことである。

根津一が当初禁止していた会の校内活動を後に認めたとするのは、前掲ルイス及びライアンの報告書の内容と一致する。さらに、この回想は、そのような根津の姿勢が、かれのキリスト教への理解のあらわれだと学生がとらえていたことを示している。そして、前述したように会の活動はきわめて宗教色が強いものであった。

さらに、宗教的活動であるにもかかわらず多数の学生が参加していることは注目すべきことである。東亜同文書院には、一九〇一年第一期七九名、一九〇二年第二期九六名、一九〇三年第三期六八名、一九〇四年第四期八四名の入学者がいたとされるが、この学生数に比して一九〇四年で最多九一名という聖書研究会への参加者数はきわめて多い。もちろん、参加者数がそのままキリスト教信者数と重なるわけではないが、初期の東亜同文書院では多くの学生がキリスト教と接触していたことは確認しておかなければならないだろう。

(二) 聖書研究会の位置づけ

一九〇四年(明治三七)以降の聖書研究会はどうなったのだろうか。東亜同文書院内では一九一五年(大正四)に学生YMCA⁽⁴⁵⁾が結成されている。これと聖書研究会を結びつける資料を見出していないが、一九〇四年以後も校内でのキリスト教に関わる事柄をみる事ができる。

一つが一九〇六年(明治三九)の日本YMCA同盟主事大塚素の来校である。かれは「東亜同文書院にて演説せし事は、この旅行中学生のみに対して演説せし始めにして終りに候」と述べている。校内での講演であるから学校側の認可があったと考えられ、これは東亜同文書院と日本YMCA同盟のつながりを示すだろう。また、この交流はその後もあつたようである。一九一七年(大正六)には中国視察中の日本YMCA同盟名譽主事フィッシャー、京都YMCA総主事村上正次や中国基督教教育大会出席のため中国に来ていた日本メソジスト教会の平岩愼保⁽⁴⁶⁾が講演を行つている。

もう一つが一九〇八年(明治四一)から一九一三年(大正二)まで英語講師をつとめた「ドクトル・マイヤース」⁽⁴⁸⁾の存在である。一九〇四年、長崎の東山学院⁽⁴⁹⁾で活動していたマイヤーズ(C. M. Myers)が上海に渡り、日本人キリスト教信者を指導して一九〇六年(明治三九)成立の上海

日本人基督協会や一九〇七年（明治四〇）成立の上海日本人YMCAの基礎を築いている。このマイヤーズは、東亜同文書院の「ドクトル・マイヤーズ」と同一人物であろう。

上海日本人YMCAで活動した池田鮮^{あきた}氏は、明治末年の上海在住日本人の状況について、「当時、上海市内には二つの日系キリスト教の集会があった」と述べ、東亜同文書院の聖書研究会とマイヤーズの集会の二つをあげているが、この二つはマイヤーズを通してつながる。先に述べたようにマイヤーズは、日本人キリスト教信者を組織化しているのだが、その活動の中に東亜同文書院の聖書研究会もあつたといえ、これは上海の日本人社会を考える上で興味深い。

このように東亜同文書院には、開校当初よりキリスト教の集会があり、そこには上海YMCAや日本YMCA同盟とのつながりがみられる。また、同会は院長である根津一に認められたもので、多数の参加者をえて洗礼を受ける学生すら存在した。さらに、東亜同文書院のキリスト教の集まりは、同時期の上海日本人社会ではきわめて大きなキリスト教団体であったと考えられる。こうした活動の存在は、従来の校内に存在した少数のキリスト教信者というところをくつがえし、初期の東亜同文書院の学生にとってキリスト教が身近なものであつたこと、キリスト教信者の

学生にとっては信仰を支える存在があつたことを示している。

三 書院精神を受け継ぐ坂本義孝

坂本義孝は、一八八四年（明治一七）五月一五日、福島県石城郡内郷村小島（現福島県いわき市内郷小島）に坂本勝次郎の三男として生まれ、キリスト教を信仰する家庭に育つた。一九〇一年（明治三四）、福島県立磐城中学校（現福島県立磐城高等学校）の第一回生として卒業、同年四月東亜同文書院商務科に第一期生として入学。一九〇四年（明治三七）四月に卒業すると、アメリカに渡り南カリフォルニア大学で経済学を学び修士号（Master of Arts）取得、一説にコロンビア大学でも学び、ニューヨーク大学から社会科学、労働問題で博士号（Ph.D.）を取得したという。一九一九年（大正八）には、ワシントンで開かれた国際労働機関（ILO）第一回国際労働総会に日本政府代表補佐として参加。一九二一年（大正一〇）、三七歳の時、母校東亜同文書院に招かれ教授となった。

東亜同文書院での活動については、坂本自身が「私は経済学史を教へておる」と述べているものの、一九二六年（大正一五）一月の商務科の「学年試験時間表」によれば、二年生と四年生の「英訳」を担当しているのみであ

る。坂本同様、東亜同文書院卒業後アメリカ留学を経て教職に就いた森沢磊五郎は「私の書院での本務は中華学生部にあったので、本部〔商務科〕の教室では僅かに商業英語のピンチヒッターに立ったのみ」と述べている。日本人主体の商務科での担当科目が少なく、一九二五年（大正一四）には中華学生部部長に就いている坂本も森沢同様の状態だったとおもわれ、主として中国人学生を担当していたのであろう。

坂本の東亜同文書院での待遇はかなりよいものであったようで、一九二六年（大正一五）一月より前のものとおもわれる「東亜同文書院教職員一覽」に記される俸給額によれば、日本人教職員中で三番目、東亜同文書院出身者では坂本よりも先に教職についていた真島次郎、馬場敏太郎、藤原茂一、清水董三、鈴木沢郎よりも高給であり、同校出身者としては破格といつてよい待遇をうけていた。このことは、後述するような度々学校を離れる活動を許されていたことにもあらわれている。

（一） 国際的活動

坂本義孝は滞米中に第一回国際労働総会に参加したとされるが、教授就任後も国際労働総会のために二回洋行している。一九二二年（大正一一）ジュネーブでの第四回国際労働総会に参加し、帰途にはエルサレムを訪問。翌年にも

次に引くように第五回国際労働総会参加のために再びジュネーブに渡っている。

（一九二三年）八月廿日に至り突然、ゼネバ（ジュネーブ）国際労資会議〔国際労働総会〕に出席する様外務省及協調会より切なる勧誘あり院長の許可を得て急遽渡欧することになり

外務省から直接要請をうけたとあることからは、かれ個人と外務省のつながりをうかがいしることができ。ほかに、一九二二年五月には学期中にもかかわらず、「幸にして院長及書院の好意により余は彼等支那青年に接し」と学校の許可を得て北京で行われた世界学生キリスト教連盟大会（WSCF）へ参加している。

このように坂本は着任早々から学務を離れた国際的な活動に従事することを許され、前述したように給与面でも厚遇をうけており、その待遇は特別といつてよいものであった。裏返せば、東亜同文書院教職員中では特異な存在であったと考えられる。

（二） 共産思想への警戒

さて、坂本義孝は教授在職中東亜同文書院でどのような活動をしていたのだろうか。留学時の研究テーマである労働問題について論じたものは「中国に於ける経済的非協同」のみである。そのほかの論述には「五卅事件と米支

「両国の關係」⁽⁶⁵⁾、「外人の觀たる支那」⁽⁶⁶⁾、「中日親和の要諦」⁽⁶⁷⁾、「支那の命運を傍觀すべきか」⁽⁶⁸⁾があるが、時事評論的内容である。また、東亜同文書院支那研究部定期講演会で「北京の万国基督教青年会大会所感」⁽⁶⁹⁾、「國際労働會議と欧州の近況」⁽⁷⁰⁾、「滿洲研究旅行報告」⁽⁷¹⁾と題して講演しているが、演題から推測するにやはりいずれも研究というよりも時事的なものとおもわれる。このような活動からは、かれは研究者として學術的研究に積極的にとり組んだようにはみえない。だが、次にあげる東亜同文書院発行の學術誌『支那研究』に掲載された文章には、共產思想への警戒があらわれており興味深い。

「護憲社の性質と事業」⁽⁷²⁾は、反共產主義組織「護憲社」を紹介するものである。

「支那に於ける教育權回収の觀測」⁽⁷³⁾は、中国の教育權回収運動の意義については理解を示しつつも矢面にたたせられていたキリスト教系大学を擁護し、「民国十二年若しくは一九二三年頃より急遽赤露の影響を受くる事となり、北京八大学を始とし教育界は殆ど赤化され共產主義化さるゝ傾向を馴致した」と運動の共產思想的傾向を指摘し、「案りに回収の喧声に聽従すべからざる多くの事由と実状とを見出すのである」と、その急進的姿勢を批判している。

「上海の將來」⁽⁷⁴⁾は、『支那研究』「上海研究号」所収諸論文をふまえた総論的文章である。反日の輿論が強い當時に

あつても先行きについて楽観的な論調を展開するが、「現今の國民政府が農工中心の社會革命、否共產革命に圧倒され、中国は再び混沌たる乱世に陥る」と、不安要素として共產主義勢力をあげている。

宗教をアヘンにたとえる共產思想の勢力拡大はキリスト教信者である坂本にとつて懸念すべきことであつたのかもしれない。實際、上海YMCAの機関誌『上海青年』に寄せた文章では「最近三四年間は中国内共產黨の浸潤を伴ふて反基督教運動が跋扈」とキリスト教信者として共產思想への警戒をあらわにしている。

坂本は研究者としては積極的でなかつたようにみえるが、その文章には反キリスト教につながる共產思想への警戒というキリスト教信者としての立場がみられ、かれの行動が常にキリスト教信仰に基づいていたことをうかがせている。

(三) 書院精神回帰の主張

東亜同文書院教授時代の坂本義孝は、研究者ではなく教育者としての印象が強い。それは東亜同文書院同窓会誌『滬友』に寄せた一四篇の文章にあらわれている。その一篇にはホームシックになつた学生との對話について述べたものがある。

人間とは一体何であるか、何故に生くるか云々の哲学

的宗教的疑問を發したるにつき私は悦んで該学生の友人となり人生問題に論及したのであつた。(中略)かくて私は此種の寂寞に打たれ此種の煩悶に悩まざる、学生に對し友人として胸襟を展き懇談したき希望を切に感したのである、これは第一期生としての「兄」が「弟」たる現在学生諸君に對し懷ふ至情である、而して又私が欣んで諸君に尽すべき当然の義務であると思ふ。

学生を「友人」と對等に扱つたり、「兄弟」と稱したりしているが、「兄弟」とは、神を父としイエスを長兄とし信者を兄弟とするキリスト教を想起させる表現である。さらにキリスト教的な姿勢をあらわしているのが、学生への禁酒の主張である。当時、校内で恒常的に行われていた酔つた学生が寮を回つて他学生に飲酒を強いる「寮回り」に對して、「酒は青年の最も嫌悪すべき敵である」と敵意すらあらわしている。禁酒法が全米にひろがりつつあつた時代のアメリカに留学していた影響もあるだろうが、この当時は、「キリスト者とは禁酒、禁煙」で知られていた時代であり、理事長をつとめた上海日本人YMCAでも禁酒運動が行われていることから、かれの禁酒の提言は信仰に基づくものであつたといえる。

そうした生活面についてだけでなく、学校自体への提言も行っている。開校当時は「東亜に通用なる最高倫理価値

を發揚するのが目的であつた」ものが、「書院なる者も時を経るに従つて制度化されて終つたのである様に聞へておる」とする。これは根津一という精神的支柱があり、いわば私塾的性格をもつていた東亜同文書院の規格化がすすんでいるのではないかという危惧のあらわれだろう。かれは次のようにも述べている。

私は日本の学制自身に疑を挟むのである、学校の卒業證書を目的として又試験通過を目的として勉学する学生では獨創的に東亜に貢獻する事はできぬと信ずる。余にとりては近年書院が外務省文部省より細微の点まで檢束さるるのではないかと疑る、が之は余りに官庁に依頼するから嚴重なる取締といふ代価を支払はねばならぬのであつて、(中略)もし官僚的形式主義を準して書院を経営せば内よりも外よりも破綻を來たす事必然である理当である、吾人は断然書院の官僚化を欲しない。

この言は根津一が院長を退いた一九二三年(大正一二)、外務省に對支文化事業局(後の文化事業部)が設置されたことを背景としている。これが東亜同文書院に与えた影響の大きさについては竹内好の一文を引き参考としたい。

東亜同文書院をふくめて、ほとんどすべての中国關係の文化事業がこの傘下にはいり、一元的な金しほりの支配を受けることになつた。(中略)この文化事業

部による統制の進むにつれて、文化事業団体に質的な変化がおこるようになった。ということは、創意が失われて、国家の意思（その実体は軍をふくめての官僚である）への盲従の傾向が出てきたということだ。東亜同文書院についても、いわゆる根津精神がうすらいでゆくのが、この時期から顕著になった。

このような変化の端緒にあつて、次に引くように坂本は精神的な改革によつて学校の独自性を保つことを主張した。それは、徳育を志向する書院精神への回帰であつた。

殉難殉教殉道の精神あつて始めて書院の反省が意義づけられ、書院の復興が実現し延いては東亜の復興に及び得るのである、真に中国の爲になる日本人ならば日本の爲になる事は勿論である、小我に捕はれ日本、日本といふておる所には日本の爲にもならぬ結果を生ずる、書院が思切つて反省すべきは斯点にある、身を殺して仁を成す、これ靈界に永遠に生くる唯一の方途である。

殉難殉教殉道の精神や靈界云々の行は宗教的な言い回しであるが、述べる内容は日中提携を掲げる「東亜同文書院創立要領」や根津の書院精神と通底する。ここに書院精神とキリスト教信仰が坂本の中で一致していたことが認められよう。

日本当局の影響を強く受けることとなつた東亜同文書院の

変化に対して、坂本は書院精神への回帰を主張した。これは書院精神すなわち根津の思想を受け継ぐことでもあり、かれが信仰の中に書院精神を一体化していたことからキリスト教信者としての行いでもあつたといえる。また、国際労働総会出席を要請されたり後に外務省囑託となつていたりするなど、かれ個人が外務省とつながりがあつたにもかかわらず、その管理を批判するという姿勢は、個人的人間関係をかえりみない無私的な点において、やはり信仰と結びついたものであつたといえよう。

しかし、坂本の主張が東亜同文書院に具体的な影響をあたえた形跡はない。かれの書院精神は、学生YMCAとの交流やそのほかの教え子との個人的関係の中ではないかされたのであろうが、全学ではかれが警戒する共産思想が盛んになつていったのである。日本人学生間では一九三〇年（昭和五）の学生ストライキや同年の第一次学生検挙事件、反戦ピラ配布事件にみられるように左傾化が顕著となる。部長をつとめた中華学生部も反日意識と共産思想の影響から運営に支障をきたすほど学生の授業放棄が常態化するようになり、一九三〇年（昭和五）九月商務科に吸収され解体された。このように教育すべき学生を失つた時点で、かれの東亜同文書院での教育活動は頓挫したといえる。

坂本は一九三一年（昭和六）三月一六日付で東亜同文書

院を依願退職している。前述したように中華学生部が解体されたことが原因と考えられるが、同時期には前年の学生ストライキなど一連の不祥事の責任をとって多くの教員が退職しており、このことも影響をあたえていたのかもしれない。

四 二つの書院精神

坂本義孝の教育活動は東亜同文書院の外でも行われた。それは上海日本人YMCAでのものである。かれが何時から上海日本人YMCAに参加したのかは不明だが、東亜同文書院在職中の一九二七年（昭和二）三月上海日本人YMCAが経営する上海商業学校の卒業式写真に姿がみえ、この頃より上海日本人YMCA理事長となり、一九三〇年からは同YMCA運営の外国語学校で英語を担当しつつ校長となつている。東亜同文書院退職後は、上海虹口北四川路阿瑞里（現上海市第四人民医院附近）に住み、上海日本人YMCAの外国語学校校長をつとめ、ここで教育活動に従事した。ここでの中国人教育について、かれは次のように述べている。

今後特ニ本会ノ事業トシテ最モ重キヲ置カントスルハ
本邦ニ留学セントスル支那学生ニ対スル日本語科ニ一
層ノ努力ヲ傾注シ彼等ノ本邦渡航□ニ学業上必要ナル

日本語ノ基礎的教養ヲ具フルト共ニ渡航上□□ノ便宜
ヲ供給セントスルモノニ有

同校では一九三一年（昭和六）までに累計千名が学んだとされるが、日中関係の悪化から一九三二年（昭和七）六月時点で「生徒ノ就学皆無トナリタリ」という状態に陥っている。ここでも坂本は東亜同文書院時代同様学生を失い教育活動の中断を余儀なくなされたのである。かれは、なおしばらく上海に滞在していたが一九三四年から翌年にかけて日本に帰国し中国での教育の場を完全に失った（聖約翰大学教授となるのは、一九四二年外務省嘱託職員として再び上海に赴任した際のことである）。

このように東亜同文書院、上海日本人YMCA外国語学校での活動が行き詰まる中でも、坂本の教育による日中提携への志向に変化はなかつた。それは東亜同文書院での教え子洪水星への援助にみることができる。東亜同文書院中華学生部卒業後、坂本の外務省への働きかけによって京都大学留学を経てキリスト教系の聖約翰大学教授となった洪水星が、自分の学生の日本見学旅行を計画した一九三三年（昭和八）、坂本は外務省文化事業部へ「若シ当方ノ切望〔洪水星たちへの援助〕ヲ御受諾セラルノ場合ハ同文書院中華学生ニ与ヘタル如キ補助乃至便宜ヲ御提供□□上度右不取敢御□考迄ニ申上候」と援助を求めている。この時、東亜同文書院にはまだ中国人学生が在籍していたが、すで

に新規学生募集は停止されており中国人教育は廃止されようとしていた。この状況下で聖約翰大学学生に東亜同文書院の中国人学生同様の待遇を与えるようと要求することは、中華学生部の役割を同大学に引き継がせようとしているかのようにもみえる。ここから坂本の教育は東亜同文書院を離れても一貫していたことがうかがえる。いうまでもなく、それは書院精神によるものであつたらう。

このような坂本の書院精神の一方で、東亜同文書院は戦禍で徐家匯虹橋路校舍を失いつつも一九三九年（昭和十四）には大学に昇格し（日本の学制の中では）発展していく。この過程を竹内好は「根津精神がうすらいでゆく」とみた。しかし、活きた中国を学ぶ学校として教育の場を確保しつつげた点に注目すれば、書院精神を基底におきつつも日中関係最悪化という状況下で現実的な選択をしたのだともいえる。

おわりに

東亜同文書院の特徴としてあげられる書院精神とは、根津一の王陽明解釈などを通して形成された思想が教育活動の中であらわれたものであつた。それは内村鑑三がキリスト教側から評価した王陽明思想の影響をうけていた点において、キリスト教的な感覚と相容れるものでもあつた。ま

た、根津の方もキリスト教に理解を示しており、校内では聖書研究会のようなキリスト教の集まりが認められていたのである。この東亜同文書院に学び、書院精神に接したキリスト教信者のひとりに母校の教授となつた坂本義孝がいた。かれの中では信仰と書院精神は一体となつており、東亜同文書院で中国を実体験しただけでなく、一五年間のアメリカ生活や国際舞台での活動のなかで欧米文化に直にふれていても、その教育活動にはキリスト教信仰と共に書院精神が存在しつづけていたのである。

しかし、坂本が根津から受け継いだ書院精神と実際の東亜同文書院が採つた姿勢は異なるものとなる。悪化する日中関係の狭間にあつて東亜同文書院は日本の学校として規格化されることによつて栗田尚弥氏が述べるように「理想と現実の狭間に自己のアイデンティティを喪失させていく」という状態となりつつも、専門学校、大学へと教育機関としては発展していく。一方、坂本の中でキリスト教信仰と一体化した書院精神は、日中提携が有力な思潮であつた時代には現実には即していたものの、日本の中国侵略が激化するにつれ理想主義的な色彩を帯びていった。結果、反日意識の高まりから中華学生部で学生を失い、つづく上海日本人YMCA外国語学校でも同じ結末をみることになる。

東亜同文書院退職以降であるが、坂本と日本人青年が満

洲事変後の状況について話した様子が伝わっている。

〔坂本〕「どうも日本の若い人は、ことの論理がわからない。凡てを既成事実として鵜呑みにし、肯定している。心ある中国人は決して承認していませんよ。沈黙しているが承服ではない。(中略)」

〔青年〕「満洲問題まで否定してかかると、我々の立場がないではありませんか」

〔青年〕「先生の立場は古い、それでは全くの敗戦論ですよ」

〔青年〕「先生の頭は古くて駄目です。そんな考へ方で発展して動いてゆく今の国際問題など論ずる資格はありません」

先生〔坂本〕は憂鬱な顔して、だまつてしまうのである。

この沈黙こそ、坂本の書院精神の帰結点であったといえるだろう。坂本退職以降の東亜同文書院内にも、学生YMCAが存続したようにキリスト教信者は存在していた。しかし、根津時代のような大規模な集会はなく、また坂本がかつてしたようなキリスト教的言辞で全学に呼びかける動きもない個人的な事柄となっていた。東亜同文書院におけるキリスト教は、坂本がそうであったように現実の前に沈黙することとなったのである。

注

〔1〕 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』滬友会、一九八二年、二〇一頁。

〔2〕 同右、二四三頁。

〔3〕 上海日本人YMCA。一九〇七年、上海在住日本人キリスト教信仰者が組織した。機関誌『上海青年』。日本の敗戦とともに消滅した。

〔4〕 聖約翰大学 (St. John's University)。一八七九年上海に開校した米国聖公会系の学校。中華人民共和国下の一九五二年に大学統廃合の対象とされ解体された。跡地は現在の華東政法学院である。

〔5〕 東亜同文会編『支那省別全誌』全一八卷、一九一七〜一九二〇年。

〔6〕 新修支那省別全誌刊行会『新修支那省別全誌』東亜同文会、一九四一〜一九四六年。第九卷まで刊行されるが以降中断した。

〔7〕 藤田佳久『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』(大明堂、二〇〇〇年)、『東亜同文書院の中国調査』『大旅行』について『大倉山論集』第五二輯(大倉山文化科学研究所、二〇〇六年)等。

〔8〕 竹内好『東亜同文会と東亜同文書院』『日本とアジア』ちくま学芸文庫、一九九三年、四二〇頁。

〔9〕 根津一。一八六〇年五月〜一九二七年二月一八日。山梨県山梨郡日川村(現山梨市一町田中)に生まれ、陸軍教

導団、陸軍士官学校（旧第四期）を経て陸軍大学校に入学するもドイツ人教官メツケルと衝突し退学。後、荒尾精（一八五九〜一八九六）の日清貿易研究所に参画し、同研究所編『清国通商綜覧』（丸善商社書店、一八九二年）を編纂した。日清戦争従軍後に退役し東亜同文会に参加。東

亜同文書院院長、東亜同文会幹事を歴任した。

〔10〕 石川順『砂漠に咲く花』私家版、一九六〇年、七八―七九頁。

〔11〕 日清貿易研究所。一八九〇〜一八九四。日清両国が提携して経済発展することによってアジアの安定がなせると考えた荒尾精が、これを担う人材養成を目指して上海に開設した。

〔12〕 栗田尚弥「引き裂かれたアイデンティティ——東亜同文書院の精神的考察」ピーター・ドウズ、小林英夫編『帝国という幻想』青木書店、一九九八年、一〇二頁。

〔13〕 川畑豊治「山洲根津一先生の『古本大学』講義」瀝友会編『東亜同文書院大学史』一九五五年、九九―一〇七頁。

〔14〕 同注〔10〕、七六一―七七頁。

〔15〕 根岸侑。一八七四〜一九七一。和歌山出身。東京高等商業学校（現一橋大学）名誉教授。東亜同文書院開校時から教鞭をとり「大旅行」を立案実現した。

〔16〕 東亜同文書院瀝友同窓会編『山洲根津先生伝』根津先生伝記編纂部、一九三〇年、四四六頁。

〔17〕 「将徳論」、同注〔16〕収録。

〔18〕 一九〇五年、根津は張之洞の協力をえて、山東省曲阜に倫理教師を養成する大学を設置しようとしたが、張の死去で頓挫した。以後も設立を図ったが実現しなかった（同注〔16〕、一四一―一四二頁）。

〔19〕 同注〔16〕、一一〇頁。

〔20〕 同注〔12〕、一〇二頁。

〔21〕 内村鑑三著、稲森和夫監訳『代表的日本人』講談社インターナショナル、二〇〇二年、二四―二七頁。

〔22〕 同注〔1〕、二六七頁。

〔23〕 ㍻い。一八六七年一月三日〜一九三九年八月。滋賀県長浜町字錦（現長浜市大宮町）の醤油醸造業藤居太郎長女。同志社女学校に学び、卒業後母校で英語、数学を教えた。一八九六年根津一と結婚。名前表記について、榮子または恵以子（同注〔16〕、二五〇頁）ともされるが、本稿では彼女自身が公正証書に「㍻い」と記していることから（同注〔24〕、一二五―一二六頁）「㍻い」とする。

〔24〕 宗像金吾編『山洲根津先生並夫人』哈爾濱…私家版、一九四三年、一三八頁。

〔25〕 同右、一三八―一三九頁。

〔26〕 同右、一九―二〇頁。

〔27〕 同注〔16〕、二四七頁。引用に際して文末を調整し、句点を付した。

〔28〕 同注〔24〕、七九―八〇頁。

〔29〕 同右、一四〇頁。

〔30〕 同右、一五九頁。

〔31〕 経元善（一八二一〜一九〇三）が一八九八年に開いた

女学校は、かれが戊戌の政変によって失脚すると閉鎖された。東亜同文書院側は「校舎の設備の如きも曾て仏国人が女学堂に充てん為め特別に建築したるもの」（同注〔16〕、九〇頁）、「前電報局総弁経元善という人が、居宅に隣接して造つた中国式貸屋四棟の一廓で、其れは曾つて学堂として使用した」（同注〔16〕、四四四頁）と伝える。また、『対支回顧録』の藤田豊八の項には「三十一年（一八九八年）、羅振玉と謀り、上海郊南高昌廟に於て郷紳経元善の経営せし女学校の跡を引受け東文学社を設立し、邦文に依て科学を支那学生に教授し、一時の盛を極め、同志田岡嶺雲を以て講師となち、その他農商務省練習生及び私費留學生等を收容して梁山泊を形成した。（中略）王国維の如きも、亦当時東文学社の学生として在学した」（対支功勞者伝記編纂會編『対支回顧録』下巻、対支功勞者伝記編纂會、一九三六年、七六九頁）とある。経の女学校施設が、東文学社に利用されたが義和團事件の影響で閉鎖され、後に東亜同文書院の校舎として利用されたのであろう。現上海第九人民医院（製造局路六三九号）。

〔32〕 同注〔一〕、九三頁。

〔33〕 坂本義孝「同じ経験から」東亜同文書院瀝友同窓會編『瀝友』第一七号、一九二二年、七四頁。

〔34〕 坂本義孝「書院の反省時代」『瀝友』第二四号、一九二四年、五頁。

〔35〕 松崎恭一、山口昇編纂『日清貿易研究所東亜同文書院

沿革史』（東亜同文書院学友會、一九〇八年、一〇〇頁）

に、「講師 チャーレス ハン子ツキス」とある。

〔36〕 池田鮮『曇り日の虹——上海日本人YMCA四〇年史』上海日本人YMCA四〇年史刊行會、一九九五年、九頁。

〔37〕 同右、三〇頁。

〔38〕 同右、九頁。

〔39〕 Robert E. Lewis, *Report Letter Development in Shanghai, Shanghai: The International Committee of YMCA, 1901. University of Minnesota Libraries Kautz Family YMCA Archives.* 引用に際し、引用部末尾のセミコロンをピリオドにかえた。また、訳文は引用者による。

〔40〕 同注〔36〕、一〇頁。

〔41〕 D. Willard Lyon, *Report of D. Willard Lyon for the Year Ending September 30, 1903, Shanghai: Shanghai YMCA, 1903. University of Minnesota Libraries Kautz Family YMCA Archives.* 訳文は引用者による。

〔42〕 同注〔36〕、一〇頁。

〔43〕 瀝友會『瀝友』第一七号、一九六四年、一〇頁。

〔44〕 佐々木亨「東亜同文書院入學者の群像」愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報』Vol. 11、二〇〇三年、一〇頁。

〔45〕 同注〔一〕、二四三頁。

〔46〕 大塚素「滿洲より長江」日本基督教青年會同盟『開拓者』第一卷一一号、一九〇六年、五四頁。

〈47〉「日本YMCA同盟名譽主事フィッシャー、京都YMCA総主事村上正次は、四月」廿四日夜東亜同文書院の招聘を受け一場の講演をせらる、〔五月一日夜原田(助)社長は三馬路一品香に於ける同志社出身者歓迎会に出席、平岩(慎保)監督は東亜同文書院の聘に応じて学生のため講演せられたり〕(上海日本人YMCA『上海青年』第三卷五号、一九一七年五月二五日、五一六頁)。原田助、同志社社長(後学長)。平岩慎保、日本メソヂスト教会指導者。

〈48〉清水董三著『東亜同文書院創立二十週年根津院長還暦祝賀記念誌』東亜同文書院同窓会、一九二一年、六九七〇頁。

〈49〉東山学院。一八八二年創立のキリスト教系学校。一九〇年神学部、一九三二年に全学が現明治学院大学と合併した。

〈50〉同注〈36〉、九一―三頁。

〈51〉同右、九頁。

〈52〉末敏敏夫「二人の使徒の中国に在りし日のことども(一)——坂本義孝博士」日本基督教青年会同盟『開拓者』復刊第九号、一九四七年、四頁。

〈53〉雄松堂学位論文センターによれば、坂本義孝(Sakamoto Yoshitaka)名のニューヨーク大学での博士論文は確認できな。

〈54〉教授就任について、長男義行氏は「書院においては中華学生部の創設に力を傾注」(同注〈57〉、三二六頁)とす

る。坂本は「米国より帰国して直ちに根津先生に会晤した」(坂本義孝「同窓会員として」『滬友』第二八号、一九二五年、三九頁)と述べる。つまり、坂本は一九二〇年とおもわれる帰国直後から東亜同文書院と接触をもち中華学生部へ参画しはじめたのだろう。東亜同文書院大学編『創立四拾週年東亜同文書院記念誌』(東亜同文書院大学、一九四〇年、一五二頁)によれば、坂本は一九二二年八月に教授に就き、一九三二年三月に退職している。

〈55〉坂本義孝「書院の反省時代」『滬友』第二四号、一九二四年、一〇頁。

〈56〉JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. B05015244600 (第七〇八画像)、東亜同文会関係雑件第三卷(H-4)(外務省外交史料館)。

〈57〉記念誌出版世話人編『江南春秋』一九八〇年、一六頁。

〈58〉「東亜同文書院職員一覽」(同注〈56〉、第四四〇―四六六頁)には記録日時が記されていない。「東亜同文書院職員大正一五年(一九二六)一月二五日現在」(同注〈56〉、第一〇四画像)には、「東亜同文書院職員一覽」にある真島次郎の名がなく、代わって敗戦時まで在職した小竹文夫の名があることから、「東亜同文書院職員一覽」は一九二六年一月二五日より前のものと考ええる。

〈59〉給額 摘要 氏名 (丸括弧内は期別。引用者が付す)

五〇〇 院長 法学士大津麟平

三〇〇 教授 法学士経済学士大野熊夫(雄)

二五〇 教授 青木喬

〔以下東亜同文書院出身者のみをあげる〕

二六〇 教授 ドクトル、オブ、アイロソフヒー 坂

本義孝(一)

二五〇 教授 真島次郎(2)

二二〇 教授 馬場敏太郎(5)

二〇〇 教授 藤原茂一(9)

一九〇 教授 清水董三(12)

一五〇 教授 鈴木沢郎(15)

二〇〇 学生監督 認可済和田重次郎(9)

一四〇 助教授 認可済久重福三郎(16)

一四〇 助教授 パチエラーオブアーツ久保田正三

(16)

一三〇 助教授 熊野正平(17)

一七〇 講師 森沢磊五郎(13)

〈60〉 同注(52)、四頁参照。

〈61〉 坂本義孝「エルサレムにて」『開拓者』第一八巻五

号、一九二三年、二七頁。

〈62〉 坂本義孝「一人一信 渡欧の途上より」『滬友』第二

一号、一九二三年、七八頁。

〈63〉 坂本義孝「北京大会の意義」『滬友』第一九号、一九

二二年、二〇頁。

〈64〉 坂本義孝「中国に於ける経済的非協同」東亜同文会調

査編纂部『支那』第一六巻八号、一九二五年。

〈65〉 坂本義孝「五卅事件と米支両国の関係」『支那』第一

七巻八号、一九二六年。

〈66〉 坂本義孝「外人の観たる支那」日華学会『日華学報』

第七号、一九二八年。

〈67〉 坂本義孝「中日親和の要諦」『日華学報』第一二号、

一九三〇年。

〈68〉 坂本義孝「支那の命運を傍観すべきか」『支那』第二

一卷二号、一九三〇年。

〈69〉 JACAR: B05015244100 (第一二画像) 東亜同文会関係

雑件第三巻(H-4)。

〈70〉 同右、第一三画像。

〈71〉 財団法人東亜同文会「自昭和二年四月至昭和二年九月

事業報告」一九二七年。

〈72〉 坂本義孝「護憲社の性質と事業」東亜同文書院支那研

究部『支那研究』第七巻二号通巻第一号、上海・一九二

六年。

〈73〉 坂本義孝「支那に於ける教育権回収の観測」『支那研

究』第八巻二号通巻一四号、一九二七年。

〈74〉 同右、二五三頁。

〈75〉 同右、二五六頁。

〈76〉 坂本義孝「上海の将来」『支那研究』第九巻三号通巻

一八号、一九三〇年。

〈77〉 『支那研究』第九巻三号通巻第一八号、一九三〇年。

〈78〉 同注(76)、七六七頁。

〈79〉 坂本義孝「青年会は何をしておるか」上海基督教青年

会『上海青年』昭和五年七月号、一九三〇年七月。

- 〈80〉 同注〈33〉、七四―七五頁。
 〈81〉 坂本義孝「改新時代の書院」『滬友』第二五号、一九二四年、一四頁。
 〈82〉 同注〈36〉、一四四頁。
 〈83〉 同右、一四二―一四四頁参照。
 〈84〉 同注〈34〉、五頁。
 〈85〉 同右、六頁。
 〈86〉 同右、九頁。
 〈87〉 同注〈81〉、一八頁。
 〈88〉 同注〈8〉、四三六頁。
 〈89〉 同注〈34〉、一一頁。
 〈90〉 もともとは、南京同文書院開校時に起草されたもので、東亜同文書院においても用いられた。同注〈16〉収録。
 〈91〉 同注〈1〉、二四三―二四四頁。
 〈92〉 「昭和四年（一九二九）六月同文書院中華学生不總會合ニ関スル件」[JACAR: B05015335700 東亜同文会関係雜件第三卷（H-4）]参照。
 〈93〉 同注〈57〉、一七頁。
 〈94〉 一九三〇年二月一日付東亜同文会会長伯爵牧野伸顯發外務省文化事業部長坪上貞二宛文書には「上海東亜同文書院中華学生部ハ本年九月一日之ヲ廃止シ從來ノ支那人本科生ハ之ヲ日本学生ト合併シ中華学生部予科ハ之レヲ特設予科ト改称スル事ト致候」[JACAR: B05015247000（第二画像）東亜同文会関係雜件第七卷（H-4）]とある。
 〈95〉 JACAR: B05015354100（第二画像）東亜同文書院関係

- 雜件／人事関係第一卷（H-4）
 〈96〉 同注〈57〉、一八頁。
 〈97〉 同注〈36〉、一六八頁。
 〈98〉 同右、一七六一―一七七頁参照。
 〈99〉 「阿瑞里（アゼリヤテレス）」と云う私の旧宅（魏盛里）の斜め向かいにある住宅には（中略）同文書院の坂本義孝先生も此処に居られた」（内山完造『花甲録』岩波書店、一九〇〇年、一八六頁）。
 〈100〉 JACAR: B05015846800（第二画像）助成費補助申請関係雜件第一卷（H-6）。
 〈101〉 同右、第三画像目。
 〈102〉 JACAR: B05015734500（第四画像）滿支人本邦視察旅行関係雜件／補助申請関係第二卷（H-6）。
 〈103〉 同注〈12〉、一一二頁。
 〈104〉 同右、一〇五頁。
 〈105〉 同注〈52〉、五頁。

※〔 〕内は論者による。また、引用文中の旧字体は新字体に改めた。